

無垢と経験の変奏

—ドストエフスキーとディケンズの小説における家庭、親密圏—

吉岡 範武 (子ども心理学科)

Variations of Innocence and Experience: Family Drama in the Novels of Dostoevsky and Dickens

Noritake Yoshioka

Department of Child Psychology, Kamakura Women's University

Abstract

This paper discusses the theme of the intimate sphere broken and regained in the family by, comparing Dostoevsky's and Dickens' novels, focusing on the social backgrounds of England and Russia. In so doing, the idea of the self-made-man and the domestic angel will be reexamined as a correlation of two allegorical fields—experience and innocence—in the industrialized world of Victorian England. In the study of Dostoevsky's novel, however, it will be shown that binary opposition cannot be found in the family that lacks a bourgeoisie family ideology, but rather in the conflict between western rationalism and preindustrial Slavism.

Key words: intimate sphere, domestic angel, self made man, innocence and experience

キーワード：親密圏、家庭の天使、セルフ・メイド・マン、無垢と経験

序論

ドストエフスキーの作家人生における、ディケンズへの傾倒はよく知られており、そのエピソードのいくつかは、彼が生涯に渡りいかにディケンズ作品を愛読し続け、しばしば創作のヒントを得ていたかを示している。本稿においては、ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』（以下『デイヴィッド』と表記）と『骨董屋』、ドストエフスキーの『虐げられた人々』を取り上げ、それらの作品における、家庭、親密圏の描かれ方を比較検討してみたい。

『虐げられた人びと』のネリーと祖父の関係は、あきらかに『骨董屋』のネルと祖父からヒントを

得たものである。二人の少女は、ともに献身的だが、ネルの方は、家庭の天使の一変奏—アイロニックなことに家庭の外に投げ出された、家庭の天使—なのだが、ネリーの方は、より深い心の傷を負った、その分、強情な性格の少女として描かれているなど、そこにはドストエフスキーの創造的解釈が加えられた人物造形になっている。これまでも、両作品を比較した先行研究としてマクパイクの *Dostoevsky's Dickens* が存在する。その中において、ネルのセクシャリティーに関する男性イデオロギーによる抑圧が、家庭の天使像との関係で分析され、対照的に、過酷な経験により、より深い傷を負ったネリーが、他者への否定性と孤立、

そして主人公である語り手に対して芽生えた恋愛感情の中を揺れ動くさまが細かく比較検討され、ドストエフスキーがネルに対して行った創造的解釈が高く評価されている。本稿においては、それを踏まえつつも、その二人の少女の単なる比較を超えて、新たに十九世紀イギリスにおけるセルフ・メイド・マンという男性ジェンダーにまつわる神話的言説への視点を加えることで、そこに経験／無垢というアレゴリカルな二項図式を補助線として導き出し、同時にそこに親密領域と家庭という、時として対立した重なり合う対概念を持ち込むことで、抑圧と分裂、和合などの可能性を宿した、家庭の相貌を広範に考察したい。

親密圏とは今日では、異性交制度に基礎を置く家庭に内在する、不平等や抑圧を超え出た、より自由で「対等な人間同士による人格のきずなの交流」（キテンズ 14）の領域を示すことばとして用いられることが多いが、本稿においては、親子や夫婦の関係を含めた、社会的な利害関係を超えて、人々が心情的に結びつく領域全般を指すものとして用いる。そうすることで、それを破壊する原因や、その回復という主題が両作家においてどのように描かれているかを、単にフェミニズムやジェンダー・クイア理論の観点からみるのではなく、より多層的な広がりの中で捉え直し、新しい視点を提示することができると思う。

第一章では、十九世紀イギリスの家庭イデオロギーがいかにして、無垢／経験領域にかかわる、男女のジェンダー分業体制を機能させていたか、その中に存在する、親密圏としての家庭を破壊する要因を視野に入れながら概観し分析を加える。第二章では、第一章での考察をもとに、ディケンズ作品の中で、壊れた親密圏としての家庭の回復がどのような形で描かれるのか、ディケンズのセルフ・メイド・マンと家庭の天使のジェンダー的差異を視野に入れて考察する。第三章では、十九世紀ロシア社会の状況を視野に入れながら、無垢／経験領域が、イギリスとは異なった意味を持ちながら男女の登場人物の中に現れるそのあり方を、ドストエフスキー的世界における親密圏の回復という視点を踏まえながら考察する。

以上の考察を通して、マクパイクの議論で中心的に論じられるに至っていない、両作品における、破壊と再建をめぐる家庭、親密圏の諸相の比較分析を、先発した近代国家イギリスと、遅れた国ロシアの、歴史、社会的背景の比較という、より巨視的な視角の中に析出してみたいと考えている。

第一章

まず、ディケンズ作品の舞台となる十九世紀後半ヴィクトリア朝の前段階から話をすすめよう。無垢の言祝ぎが、産業革命で先発したイギリスに始まったのはいわれなきことではない。無垢は失われた過去の中にその姿を見せるものだからだ。無垢／経験のアレゴリカルな二項図式は、ブレイクやワーズワースなどイギリスロマン派の想像力と世界観、また子ども観に現れる。無垢は基本的にその理想的イメージとして、アルカディックな牧歌的世界を持っている。そこには、産業社会の塵埃にまみれず、資本主義的な搾取、疎外経験を未だ知らない世界への哀惜の思いが見られ、都市化、産業化を「経験」と「悪」の場、自然との調和関係にある世界を「無垢」と「善」と見る、比較的素朴ともいえる二項図式が存在している。実際に、イギリスロマン派詩人の多くは、産業化のただ中にあるイングランド都市部を嫌い、イングランド北部の自然に恵まれた、湖水地方を詩作活動の拠点、インスピレーションの源とした。無垢と経験の対立図式は、ロマン派の詩的想像力において、都市／田舎、子ども／大人、自然／文明など、様々な対立図式のアスペクトと結びつき、それらは隠喩的連想において結びついている。そして、ケネス・クラークが指摘しているように、この自然崇拜は、衰えつつあったキリスト教に変わる、代替宗教としての意味をもっていた（クラーク 261）。

しかし、またイギリスロマン派の流れの中に位置づけられる作家としてロレンスを考えるならば、このキリスト教の空白を埋めようとする営みにおいて、異教世界の自然は、セクシャリティーを前景化させる形で男女関係の私的な親密空間の中に流れ込んでくる可能性を宿していたといえてよい。

たとえロレンスの思想そのものは、ヴィクトリア朝のモラルに対するアンチテーゼであったとしても、そもそもの代替宗教的、超越の場所としての家庭というモチーフが存在していることは以下の議論の前提として確認しておきたい。

ディケンズ作品の舞台である、十九世紀ヴィクトリア朝世界においては、生産活動の場が、家から社会へと変化するに伴い、社会＝public 領域と家庭＝private 領域が分化した。産業資本のダイナミズムと専門職の拡大が進行する当時のヴィクトリア朝ブルジョア社会が、知識、経験、資本活動を存立基盤とする成長・発展原理であったとすれば、夫はその社会を活動の場とし、また妻にとっては、それらの経験領域から隔離、保護された、家庭という名の親密性領域こそが、受け持つべく与えられた聖域となった。

ここで注意が必要なのは、そこに存在したのが、社会での経済活動と、家庭の切り盛りと言う、単なる効率化された労働のジェンダー分業体制だったのではなく、モラルのレベルでのジェンダー化も生じていたということである。つまり、夫が、社会の荒波から、家庭を経済的に守る、保護者、監督者としての責任を負ったとすれば、妻は、その家庭において『家庭の天使』として精神性・無垢性を体現していたといつてよい。コヴェントリ・パトモアがその“The Angel in the House”に詠んだように、それは「経験」から切り離されることで清らかな無垢性を保持し、社会の荒波の中で傷つき汚れ、家庭に戻ってくる夫に献身し、清め、癒す存在であった (Patmore 76)。このように、ロマン派が墮落の場と考えた都市生活のなかに、十九世紀ヴィクトリア社会は「家庭」というもう一つの、代替宗教の場を、発明したのである。もちろん、現実にこの時代に生きていた主婦たちが、どこまでこのアッパーミドルクラスの女性の理想像を体現していたかについては、多くの実証的研究にもかかわらず、推測の域を超えない部分はある。しかし、女性たちの多くが、この理想像を自主的に受け入れようとしたのは事実であり、それは神話として生きていた。そして、その家庭はまた、世間という「経験」の場の波風から守られて

子どもが成長するための聖域でもあった。

妻はそこでは、一種の崇拜の対象と化し道徳的な優越性を夫に対して持つこととなる。ディケンズ作品においても、例えば『デイヴィッド』のマグネスなど、この「家庭の天使」の系譜に連なる女性登場人物が数多く存在するが、彼女たちは男性主人公が人生の途上で混乱と迷いに陥った時の導き手としての性格を付与されている。社会的利害に汚染されない、相互配慮から成り立つ家庭という名の親密圏は、利害を超えた、配慮、協力の関係である。いわば、経験世界は、無垢の世界を必要とし、それに依存する構造をもっていた。それに対する崇拜、抑圧、あるいは崇拜という形の抑圧等、様々な可能性を宿しながら。このように家庭は、世俗化した十九世紀社会にあって、ちょうどロマン派にとっての自然がそうであったように、汚れなさや無垢性を保障する祭壇、宗教的代替物であった。

そしてセクシャリティーもまた、家庭を支える異性愛制度の中に閉じ込められ、馴致されることで、その親密領域の形成に寄与することとなった。ちょうどカルヴィニズム的、節制と自己抑制の論理が、資本主義社会におけるプロテスタンティズムの精神構造へと世俗転換したのと相似の、そして、それと重なりあう形で、セクシャリティーは、私的親密性領域で、家庭の天使という崇拜の対象を得、自己抑制を促され、エネルギーを備給することで、責任能力のある夫を造りあげ、さらにはその社会での活動を促し支える力となった。以上のような、労働とモラルのジェンダー化を伴う、性、婚姻、聖の三位一体となったロマンチックラブ・イデオロギーは、代替宗教として儀礼的に反復、強化、再生産されていったのである。

また、この点に関しては、同時代のアメリカ社会などの方が、より「純潔」を重んじた、文字通りのピューリタン社会だったかもしれないが (ノッター 35-36)、十九世紀イギリスにおける、「家庭の天使」と「ファムファタール」の二項図式の存在は一それ自身が、夫のセクシャリティーの二重基準というパラドクスを内包しているとはいえず「家庭の天使」におけるこの純潔や無垢という一

種の道徳的力が夫の上に、一定の支配力を及ぼしていた事実を示していると言えるだろう。

十九世紀イギリスは、ヴィクトリア女王自らが国民に対して示した、夫アルバート公との理想的な家庭の姿、あるいは、ディケンズ、ウィルキー・コリンズによるクリスマスストーリーの流布とクリスマス風習の定着、主婦の心得に関する手引書の類など、この理想的家庭像を流通、浸潤させるための社会装置を数多く備えていた。そこでは、敬虔な愛情深い母親像、家庭を社会の荒波から守る勤勉なよき父親、素直で従順な子どもたちという、家庭団欒の理想的イメージが繰り返し現れる。そこにあるのはブルジョア版、聖家族の伝統なのだ。

しかし、そのような絵に描いたような理想的、中流の家庭像はまた同時に、常に崩壊のモメントをその内部に宿している。なぜなら、聖と俗にまたがる無垢世界＝private と経験世界＝public は、截然と画定しておくことができない二つの領域だったからである。一つには、男たちが活動するpublic 領域における、さまざまな形の失敗や経済的損失は、そのまま、private 領域に影響を及ぼし、家庭を瓦解させてしまう。そして、ディケンズ作品においても、自己管理能力を持たない父親が、しばしば家庭崩壊の原因となっている。例えば、『骨董屋』においては、キルプによる家庭内への侵入は、ネルの父親代わりである祖父が、抑制を失ったギャンブル熱につけこまれた結果招いてしまった悲劇である。またディケンズ自身、幼少期に、散漫な経済感覚を持っていた父親の金銭上のトラブルが原因で、債務者監獄へ家族もろとも収監されたことがあり、その体験を彼が生涯にわたり、トラウマとして引きずった事もよく知られた伝記的事実である。このように、自己管理能力をもたない父親のpublic 領域での舵取りの失敗は、この家庭という親密圏を危険にさらし、それを一瞬にして破船させてしまう危うさを常に持っている。

さらに二つ目の理由として、この無垢世界＝private と経験世界＝public の関係は、そもそもの出発において、女性への空白状態の押しつけに

よって、あるいはその女性に対する権利の制限によって、不平等を抱え込んでおり、家庭は、想定される親密なる聖域の、あくまでも擬制・パロディーという側面をもっていたからである。そして、その私的領域は、教会権力の法システムを背景とする、婚姻制度という契約の中に囲い込まれ、しかもその契約は一種の不平等条約であった。

聖域としての家庭のイデオロギーの背後には、このような二面性と潜在的な亀裂が見え隠れしている。知性と経験を備えたよき夫の影には、抑圧者も存在している。デイヴィッドの義父モールドンなどの人物描写に見られるように。家庭の抑圧者としての、グロテスクなカリカチュアであるキルプや、功利主義者である『ハードタイムズ』の父親などは、先に述べた、自己管理能力が弱く、それゆえ家庭への責任を果たせずに破綻させてしまうタイプの父親たちとは対局に位置しており、自己管理を成しうる人間であり、その意志の力は他者を支配、コントロールしていく。彼らは、変動するブルジョア社会で、一定以上の社会的成功を収めた勝者である。そして、そこにはまた家庭の天使の裏側に、フォールン・ウーマンやニュー・ウーマンという影がちらつくのである。

社会の競争で勝利したから正しいのだという、事後的な道徳的正しさの証明は、蓄財の成功が選ばれてあることの事後証明と捉えられたカルヴァニズム的な選民思想と、また特に十九世紀イギリスにおいては、その科学イデオロギー版とも言える、社会進化論とに支えられ、社会的勝者の無条件な正当化につながった。この論理は言うまでもなく、その後、優性思想にもつながって行ったし、今日のアメリカ社会におけるネオコンたち右派の弱者切り捨ての論理にも通じている。

以上が、十九世紀当時のイギリスにおける、無垢、経験領域にまたがる、夫、妻を通して働く家庭イデオロギーのあり方だった。確かに、ディケンズの作品においては、その家庭は、例えば『デイヴィッド』のユライアや『骨董屋』のキルプたちなど、外部からの侵入者の脅威にさらされ機能不全に陥るし、またロマン主義以来紡がれた無垢な子どもイメージにも拘わらず、作品には『デ

イヴィッド』の主人公を始めとして、多くの孤児が登場し、彼らは幼くして社会の厳しい経験世界に投げ出される。しかし、神聖なる家庭にまつわる男女のジェンダー的イデオロギーは、理念としては、はっきりと存在しており、その家庭・親密圏の回復という主題は破綻した家庭においても、模索されるのである。

そこには、セルフ・メイド・マンの思想がこのアングロ・サクソンの勝者への傾倒の思想と親和性を持ちながらも、同時に微妙な距離を保ちながら登場する。そこでは富や家柄というバックグラウンドを持たない男、文字通りのあるいは比喩的意味での孤児が、功を遂げ名をなし、その社会的着地点から事後的にそれまでの経験領域のプロセスが、ポジティブなものもネガティブなものも、すべて正当性を与えられる。そこにある親密圏の回復という主題の現れ方は、十九世紀社会を舞台とするディケンズ作品においては、主に少年の成長物語に付随するものであり、少女はそれを導く、精神的な役割を果たしている。次章においてはこれまでの論じた内容をもとに、ディケンズ的世界におけるセルフ・メイド・マンが、どのような形で存在し、都市ロンドンという経験世界を渡りながら、最終的に、アグネスという家庭の天使とともに親密領域を回復するのか、同じく、家庭の外の経験世界に投げ出された、『骨董屋』のネルととのジェンダーの差異も視野に入れて考察したい。

第二章

ディケンズ作品の多くにおいて、その舞台として選ばれるのは、変貌する都市ロンドンである。それは、政治的発言権を増した新興ブルジョア階級が勢力を得、新しい時代の原動力となっていくロンドン、前近代と近代が交じり合い、過渡期特有の喧騒と混乱が支配するロンドンである。そこでは、舗装されない道を馬車が泥を跳ねて走っている。また近代資本主義の発達に伴う合理主義的思考が、利潤追求にばく進する中で、そこから振り落とされた人々や、工場労働者として下支えする人々の群れが、スラムを形成し、都市の暗部と迷路が、犯罪の舞台となる。ディケンズ作品の少年

たちが「経験」を余儀なくされる舞台は、このような都市化現象の真ただ中にある十九世紀のロンドンである。ボームガーテンは以下のように指摘している。

Where other writers reinforce conventional stereotypes of the poor that would develop spurious racial distinctions and make class division a seeming fact of nature, Dickens's characters dramatizes their situations as part of a strategy of overcoming such barriers... Dickens does not speak for the class divisions so evident in the city or accept them as natural or a social given: rather, his plots enforce the possibility that the urban world is the site of moral self making precisely because it brings people together across class and social lines. (*Fictions of the city* 115)

産業革命以前の社会において、人々が、親の職業を受け継ぎ、安定したアイデンティティーを受け持ち、それに自足していた古典的演劇空間だったとすれば、都市ロンドンの階級社会においては、あらゆる社会状況に対する転倒的意欲が渦巻いている。それは一つには言葉によるものでありユーモアや風刺の中に、時として過酷な現実を相対化していく庶民の知恵や活力を表すものでもある。ミコーバ氏にも特徴的な、過剰なほどの言語表現へのこだわりは、自らの置かれた状況に距離をとり、パロディー化する、現実と言葉の弁証法的関わり合いの一端を示している。庶民の猥雑な活力の表現は、シェイクスピア以来のイギリスの喜劇的伝統の上にたっているとも言えるかもしれないが、単にリアリズム小説とは異なるディケンズ世界を生み出している。それは、「日常の事物のロマンチックな面」(『荒涼館』(1) 6) とディケンズ自らが述べた、彼の感性にかかわるものだろう。しかし、それは喜劇的な様相をとるだけではなく、十九世紀イギリスの階級社会において、現実的な社会上昇を志向する、自己劇化の衝動をも生み出すのである。

この都市型劇場空間は、階級を超えて、あらゆる

る社会領域に属する人間たちとの日常的な接触、偶然の出会いを可能にする。また、それゆえ、異なる階級の、さまざまなロールモデルとの出会いが潜在しており、アイデンティティーの流動性、演技と韜晦、自己の再帰的な書き換えの可能性へと開かれているのだ。あらゆる人々は演技者として招かれている。言語表現のみならず、自己形成をもたらす選択的な行動表現において。そこでは経験とは、世間知と社会上昇に繋がる積極的価値を付与されながら、時に、階級差を超え出る場所に宿り、それゆえ、自己劇化の自由は **moral self making** との関わりの中で、階級上昇あるいは、墮落と破滅へと向かう両価的なものとなる。そこには、にわかジェントルマンから、スリや犯罪者などアンダーグラウンドに生きる人間たちがひしめいている。

デイヴィッドは、モールドン姉、弟によって家を追い出された後、孤児となり放浪する中で、さまざまな人々との出会いを経験する。そして時に騙され、持ち金を巻き上げられたり、相手の真意を取り違えたり、またロールモデルや反面教師としての年長の少年、大人たちと出会い、経験を積み重ねそこから生きる上での教訓を学びとっていく。その世界は、コミュニティーの成員同士、互いの存在をよく知っていた産業革命以前の伝統社会とは異なり、互いが互いにとって文字通りに、あるいは比喩的に、匿名の存在であり、その意味づけを自分の経験を通して、また自己との再帰的な関係性の中で書き換えていく流動変化の世界である。

「固定」的 **inheritance** と反復ではなく、「流動」的 **experience** と変化が積極的な意味を持つ。つまり、財産は、さらに **moral existence** としての自己すらも、所与のものではなく、自己決定、自己投機の結果として、事後的に成立する可変的、流動的なものとなる。ここにあるのは、一章で触れた、築いた財産がもたらす **social status** と自己の内容である **moral status** が矛盾なく結びついたプロテスタント的精神の具現化の一例であり、繰り返しになるが、そこでは財貨も自己のモラルアイデンティティーも、世襲社会においてそうであっ

たような、教会や、土地という保証先を伴った所与ではなく、自らが作り上げるものへと変化したセルフ・メイド・マンの思想が、しっかりと結びついている。

つまりセルフ・メイド・マンはさまざまな刺激と誘惑の世界に投げ出され、多くの選択の自由に囲まれながら、時に失敗や逸脱を経験しながら、再び自己を律し自らのキャリアをつくりあげて行く。そして、敢えてよりよき選択をしたことの事後的な効果・褒賞として姿を現すことになるわけであり、そこではネガティブなものも含む、あらゆる経験の領域は、社会的疎外経験も男女関係の失敗も、成功と安定の場所に着地した限りにおいて、遡及的に肯定的な意味をもつ。デイヴィッドは、法律事務所の書記から身を起し、小説家としての成功を手に入れ、着実に社会の中でステータスを高めて行く。アッパーミドルのステイアフォースをロールモデルとしながら、現実的に社会的成功を収め、階級上昇を果たすのである。

この社会上昇の物語において、見逃してならないのは一章において指摘した家庭の親密圏を壊す二つの要素一男の自己管理能力の欠如と抑圧性とデイヴィッドの関係であるが、デイヴィッドは、人生の出発において潜在した抑圧的な強い父親と、管理能力のない弱い父親を、その経験と成長の過程において克服しているのである。幼少期に死んだ父親に代わって家庭に入り込んできた継父モールドンは、妻と子供を抑圧する夫・父の典型である。そして、母親の死後、家を追い出された身よりのないデイヴィッドにとっては、ミコーバ氏が、友人でもあり保護者でもある、擬似父親的存在となる。ミコーバ氏のように、波乱に富んだ人生を送りながら、どんな逆境においても笑いを忘れず、懲りることなく再起を誓う登場人物も、経験の肯定に関するディケンズ的にカリカチュアライズされた姿ではある。しかし、デイヴィッドはその人の良さを愛し、共感を覚えながらも、彼の自己管理能力の欠如に対しては、一定の距離を保ち、客観的な見方をするようになる。同時にデイヴィッドは、モールドンたちの偽善性に対する、強烈な嫌悪感と批判意識も保っており、社会上昇の過程

において、仮にもモルドンのなものを取り込み内面化してしまうようなことはない。読者を引き付けるのはデイヴィッドが保つ健康な批判力と善性なのである。

それは、時としてわがままで幼児性をもった、彼の最初の妻ドーラに対する態度にも表れている。おそらく、これが失敗した結婚だったことを予感し始めても、彼はドーラの自由を尊重し、その態度が抑圧的なものに変化することはない。モルドンとその姉が、デイヴィッドの母親の判断力の不足を理由に、完全にその自由を取り上げ、抑圧的な支配のなかに身動きできなく抑え込んでいったのとは、まったく対照をなしている。そして、ドーラの死後、最終的には、経済的安定に支えられた、夫婦間の調和した親密圏の回復が、家庭の天使アグネスとの間で築かれる家庭において成就する。親密圏を破壊する二つの要素は、成長したデイヴィッドが手に入れるこの家庭において内面的に克服されている。

このように、破壊された家庭から出発しながら、そこに最終的には経済面の回復、そして親密圏の回復がセルフ・メイド・マンの物語を完結させるための条件として備わっている。それは、弱い夫・父親を克服するとともに、ロマンチックラブ・イデオロギーに潜在する、圧政的な夫・父親の克服を通して、**moral fashioning** を完成させた存在なのである。

しかし、ここには、ジェンダーイデオロギーの拘束性も透けて見える。すなわち、経験が一ポジティブなものもネガティブなものも含めて一人格形成へとつながるための条件として、経験の主体が男性ジェンダーであるという、ヴィクトリア朝小説の約束事もまた示されているのである。つまり、少年の場合には、孤児という不利な境遇であるにもかかわらず、その善性を保持することで、最終的には社会（**public**）の成員として着地することが、可能になる。たとえば『骨董屋』のキットと公証人のガーランド一家の交流においてキットの正直さが、ガーランド氏の目に留まり、母親や若い兄弟姉妹とともに暮らす彼らの家庭にささやかな潤いがもたらされるようになり、少年の未

来に希望が暗示されるのもその一例である。

少年のジェンダーには「主体性」が社会から前提として与えられており、「経験」が許可されている。そして、その「主体」の形成を側面から支え導くのが常に、家庭の天使なのだ。デイヴィッドには、彼の生活圏がアグネスから現実には遠く離れてしまい、交流が途絶えているように見える時でさえ、常に彼女が北極星のような導きの星として思い出される。

「好きだの、嫌いだの、とりとめもない、いろいろなその頃の愛の思い出に耽って見たが、結局、今なお時に耐えて残っているのは、アグネス一人だった。彼女だけが、常に私の星として、いよいよ高く、いよいよ明るく輝いているのだった。」（『デイヴィッド・コパフィールド（四）』385）

それに対して、女性は、世の中の経験世界から隔離された「家庭の天使」としての役割に拘束されている。『骨董屋』のネルが両親のいない孤児として、祖父ともども世の中に投げ出された後、ロンドンを後にしてカントリーサイドに向けて旅を続けるが、それは基本的には、経験世界からの逃避という意味をもっている。ロンドン少年たちにとって、その上昇と転落の二つの方向に向けて人生を開く場所だったが、少女にとって、この都市の経験世界は、唯一、転落の場所なのだ。たとえば『オリヴァー・トゥイスト』でフェイギンスの掏摸グループにいる女性たちのように。それゆえに、ネルは都市ロンドンを離れる必要があった。

しかし、その行路においても、男たちの潜在的な視線に晒されるとき十四歳という年齢が、ネルのセクシャリティーを前景化する結果となる。特に、ミセス・ジャガードの移動人形館においても、その解説をするネルに対して、人形たちに対する以上に、観客の注視がそそがれる出来事は象徴的だ。この後ネルは、移動人形館を後にする。このように、ネルの祖父との逃避は、家庭の外の世界を経験しているようでありながら、実はセクシャリティーを含めた経験世界を上滑りしていく一種の逃避なのだ。少女の純潔に重ねあわされた家庭の天使イデオロギーが、読者の欲望とそれを取り込

むディケンズの語りの中で、ネルを彼女が投げ出された経験世界のただ中において、経験の外部に保護し閉じ込めている点についてマクパイクは指摘し、オルダス・ハクスレーがその読者への迎合性ゆえに、『骨董屋』を俗悪な作品とした批評などを挙げている (MacPike 25)。

デイヴィッドのような少年キャラクターの孤児が、経験世界を渡って行く中、時に裏切られたり騙されたり、隷属におしこめられたりと、ネガティブな体験をしながらも、善性・徳性を保持することで、その社会的上昇を約束されるとすれば、少女は、徳性—その中心をなすのは *chastity* = 純潔という美德である—を守ることで、階級上昇と、保護者としてのよき夫との出会い、そして受け持つことのできる家庭を約束される。そしてネルは、その悲劇の中においても、先生が副牧師を務める、教会に終の棲家を与えられるのだ (MacPike 71)。

以上の考察を、男女の違いに添って、まとめると以下ようになる。社会的アイデンティティーが流動化し、自由選択と自己責任の意味合いが大きくなったロンドンの都市生活において、主人公を、ビルドゥングスロマン的経験世界に招き入れるのが、セルフ・メイド・マンという社会的ロールモデルだとすればそれを側面から支えてくれるのが「家庭の天使」という無垢領域の存在だった。経験は無垢を必要としている。そして少年たちは、少女よりもより広い行動と選択の自由が与えられていた。しかしそれは、あくまでもジェントルマンという階級社会の理想を下敷きとして、そこに分け入っていく可能性を示してくれるセルフ・メイド・マンというミドル・クラスのイデオロギーが、活力を引き出してくれる神話として息づいていたからである。ここには社会的イデオロギーレベルでの父性のモデルが存在しているといつてよい。つまり、孤児には、彼らを導く個々の擬似的父親が存在しているが、その背後にこのイデオロギーレベルでの父親=ファロスが存在していると言ってもよいのである。そのミドル・クラスのイデオロギーは、19世紀というキリスト教が影響力を失っていった時代にあっても、カルヴィニズム的資本主義という疑似宗教を、聖性の言説の中に

セクシャリティーを囲い込む、家庭という名の今一つの代替宗教と結びつける中で、自己劇化の自由と方向性を男たちに与えた。それは何者かに成れる自由である。しばしば、ドストエフスキー的な、エネルギーと意志力を豊富に備えながら、何ものにもなれない、スタブローギンなどに代表されるニヒリズムの極はこのアングロサクソンの現実肯定と意欲の中には存在していないのである。

第三章

十九世紀イギリスのブルジョア社会の中において確認された無垢性、そして自由選択と経験領域という主題はドストエフスキーの『虐げられた人びと』においては、いかなる様相のもとに現れるのであろうか。そして親密圏の形成はいかなる射程を伴うのであろうか。以下、イギリス、ロシアの歴史状況、社会背景の差異を視野に入れて考察する。

十九世紀がイギリスにとって、ブルジョア階級が大きく成長した時代だったのに対して、ロシアでは状況は全く異なっている。未だ皇帝専制下であり農奴問題を抱える、遅れた国ロシアにおいて、イギリス的なブルジョアは不在である。確かに、エカチェリーナ二世により進められたロシアにブルジョア階級を作り出そうという試みから百年を経て、ロシアは曲りなりに一部のブルジョア階級の出現を見たものの、それは決してヨーロッパ的な意味での政治的な発言権を備えた、したがって国家や教会のイデオロギーとの結びつきの中で自己生成力を備え、新しい時代を牽引するようなブルジョア階級ではなかった (ヒングリー 215-216)。そして都会派作家ドストエフスキー作品に多く登場する都市生活者たちの多くは、デイヴィッドのような、変動社会で階級上昇を目指す澁刺としたエネルギーに満ちたキャラクターではなく、閉塞した状況の中で鬱屈した気分を抱えて生きる小役人などの小市民たちである。

ロシアでは、十九世紀初頭の皇帝暗殺を図ったデカプリストの乱に象徴されるように、専制の旧弊を排しロシアの進むべき未来を切り開こうとする運動の中心は、常に革命の地下水流を潜伏させ

ながら貴族階級によって担われた。そして、進むべきロシアの未来と社会改革に関して、西洋主義者とスラブ主義が左右に分かれ対峙し、また四十年代の西洋主義インテリゲンツァと、帝政転覆の急進的革新思想を育む、功利主義的、唯物的な六十年代の「ニヒリスト」たちが世代間の対立を生み、そしてその片方には、何百万人もの農奴たちが、革命の呼びかけに応じようとしないうロシアの物言わぬ身体として横たわっている、無秩序で、混沌とした状況があった。

このように、すべてが「偶然の家族」と化していく、ロールモデルとしての父親像を喪失した混乱状況のロシア（中村 179）において、自由意志と経験そして、無垢は、イギリスにおいて確認した内容と比較した場合、まったく異なった様相を呈すると思われる。以上、当時のロシアの状況を確認した上で、『虐げられた人々』についての考察に入りたい。

まず『虐げられた人びと』を構成する二筋の物語を整理しておく。その一つは、小説家である語り手と、幼少の時から身寄りのない語り手を引き取り養育してくれた地主イフメーネフ夫妻、夫妻の娘であり語り手のもと恋人ナターシャ、そしてナターシャの新しい恋人アリョーシャとその父親であるヴァルコフスキー公爵をめぐる物語である。ナターシャの父である地主のイフメーネフは、たまたま隣接する領地を手に入れ、移り住んで来たヴァルコフスキー公爵と知り合いになり、その縁で、その後、不在領主化した公爵のために息子アリョーシャを預かり、また公爵のために新たな領地の購入とその管理を請け負うことになる。しかし、後になって、公爵からの一方的な言いがかり、つまり、イフメーネフが公爵から委託された領地の購入に際して購入代金をごまかし着服していた、さらには、娘のナターシャを唆し、アリョーシャを誘惑させようとしたという侮辱的な言いがかりをつけられたのをきっかけに関係が悪化、裁判で争っている。イフメーネフ一家の平和は、公爵の手のひらを返したような裏切り行為と係争によって破壊されているばかりではない。娘ナターシャは、その後、アリョーシャと駆け落ちするこ

とで、公爵の言いがかり的主張に根拠を与えてしまい、父親を不利な状況に投げ込む。娘に背かれ、社会的名誉も傷つけられたイフメーネフは娘を勘当する。

そして、それと並行して進行するもう一つの話が、小説冒頭において、語り手が街角の食堂で出くわす、ほとんど廃人と化してペテルブルクの街を彷徨う、孤独な老人スミスと、その老人の死後、姿を見せる孫娘ネリーをめぐる謎である。行きがかりから、彼らと関わり合い、売春宿に捉われかけているネリーを救出することになる語り手と、その友人である探偵の働きにより、老人とネリー、その亡き母親にまつわる謎が解き明かされる。そして、ネリーの母親が、若き日に父親スミスのもとを、彼の財産関係の重要書類を持って家出し、その結果、経済的破綻に追い込まれたスミスが、彼女を勘当したこと、金銭目当てで彼女を駆け落ちへと誘い込んだのが、ほかならぬ若き日のヴァルコフスキー公爵であったこと、そして、その後公爵に捨てられた母親は、父親スミスに赦しを乞うも拒絶され、公爵との間に生まれた幼いネリーを抱えたまま、困窮の内に死んだことなどが、次々と明らかとなる。以上のように、二組の親子において、娘の家出と、父親による勘当という家庭の悲劇が並行して描かれており、ともにその元凶としてヴァルコフスキー公爵が存在するという構図となっている。最終的に、語り手の献身的介護でネリーは精神的に再生し、彼女が母親と祖父の悲劇的な話を物語ることでイフメーネフが目覚め、アリョーシャに去られて絶望するナターシャとの和解がもたらされ、ネリーは死の床でイフメーネフ一家の愛情世界に抱きとめられ息を引き取る。

ここでまず確認しておきたいのは、ディケンズ作品において、家庭の無垢領域の担い手であった、女性キャラクターは、本作において空白としての無垢領域を引き受ける存在ではないということである。彼女たちは自分の主張を持ち、選択し、行動する主体として描かれている。ナターシャの母親は、夫イフメーネフに黙従する前近代的父権性時代の古いタイプの女として登場するのに対して、ナターシャの駆け落ちに見られるような、新しい

世代の女性の自己主張と自由意志の行使が、物語展開の重要な要素として存在しており、中村が指摘するようにこのナターシャは「1860年代ロシアのノラ」(中村 180)なのであり、「当時論壇を賑わした『女性の解放』の問題」(中村 180)の反映が見られる。彼女はロシア版のニュー・ウーマンなのである。

先に確認したように家庭の破壊の原因には公爵が存在するが、もう一つ、この女性の意志の主張がそれに関わっている。そして本作において家庭はより根本的な破壊に晒されているとあってよい。『デイヴィッド』や『骨董屋』において、彼らの家庭を壊す原因の一つは、外部からの侵入者(ユライアやクイルプ、モードン夫妻など)であり、その多くは経済問題という形をとっていたが、そこで親子関係そのものに亀裂が入ることはなかった。たとえば、『デイヴィッド』ではデイヴィッドと彼の母親の愛情世界は、モールドンによる抑圧的な扱いによる母の死によって破壊されるが、優しき母親のイメージはデイヴィッドの中で温存され、「家庭の天使」アグネスへと受け継がれていく。また、法律事務所を経営するアグネスの父の家宰の甘さゆえに、ユライアの事務所乗っ取り計画を招き、アグネス自身の身も危機に瀕するが、彼女は常に父親に対して同情的で、変わらぬ味方であり続ける。そして、破壊された家庭・親密圏の回復は、セルフ・メイド・マンにより完成された。

それに対して『虐げられた人々』において、娘が、囲い込まれた空白としての従順性や無垢という役割を拒否し自己主張・自己選択を始めることで、父親イフメーネフがその父親としての面目、社会的な名誉が傷つけられ、家庭が破壊しているのは象徴的である。親子の信頼関係という親密領域がすでに喪失してしまっているのだ。ナターシャは父親イフメーネフについて言う。

「父が愛していたのは、赤ん坊、大きな赤ん坊なのよ。あの人はわたしのわたしの子どもっぽい無邪気さにとっとり見惚れていたのよ…でもわたしはもう昔のわたしじゃない。わたしは随分たくさんのことを経験したわ。」(『虐げられた人々』

180)

この女性の自由意志の問題は主体性の自覚とともに少女ネリーにも見られ、彼女の自我に閉じこもる否定的な態度と、その解放という主題にもつながっている(MacPike 38, 46-47)。

反対に、男性キャラクターに目を転じてみると、社会的勝者の位置に立つ公爵を除けば、他の男性キャラクターたちは、そのエネルギーが社会的な活動や自己実現という方向に向けられた一般的な意味での、男性ジェンダー的なものを感じさせない。語り手である主人公はデイヴィッドと同じ、小説家という設定になっているが、職業的な活動の背景は後退して、その行動は博愛主義的な無私の奉仕の中にパターン化されていて、公爵に「終始無力な奉仕だけの敗退者」と冷笑される。公爵はまた次のようにも述べる。

「アリョーシャは君の言い交した女を奪ったんじゃないありませんか。ところが君ときたら、まるでシラーかなにかのように、あの連中のために一生懸命骨を折って仕えておいでだ…それじゃなんだか汚らわしいお芝居のようなもんじゃありませんか…それでよく嫌気がささないもんですね」(『虐げられた人々』191)

イフメーネフもまた、裁判に敗れることで破産し、社会的敗者の側に立ち失意の中に内向する。行き場もなく、所在無げに自宅にこもり、また時としてナターシャのアパートにこっそりと出かけようとするイフメーネフは、娘への押し殺した愛情と傷つけられた父親の誇りに引き裂かれ苦悩する人物であり、妻に八つ当たりする彼は、いわば女性ジェンダー化していると言える(中村 187)。

つまり、イギリスにおいて、キリスト教の不在を埋める疑似宗教的イデオロギーが、市民階級に活力と方向性を与えるよう、内在化されており、そこに男性ジェンダーの主体による自己劇化の自由が成立していたのとは異なり、父親(=ファロス)不在のロシアにおいては、経験は、再帰的な自己の書き換えの中に自己実現を図る男性ジェンダー主体を形成しながらその内部に宿ることはないし、また無垢領域もモラル的分業の中に、女性だけが肩代わりする領域としても現れないのであ

る。

家庭の親密圏は、このように前近代的父権性において、機能しなくなっているだけでなく、次世代の新しい世代の男女の結びつきの中に回復されることもない。ナターシャは、一度は将来を約束した、語り手である小説家との約束を反故にして彼のもとを去る。しかし、駆け落ちをした公爵の息子アリョーシャとの関係も、彼のあてにならない性格により結婚へと結実しない。ここに見られるナターシャに裏切られて、なお彼女に尽くそうとする語り手の博愛主義的な行動、また移り気なアリョーシャに振り回され苦しみながらも、束縛しようとはしないナターシャの態度は、先述の六十年代の進歩主義的ニヒリストたちが理想として掲げた、新しい時代の男女の愛のステレオタイプ、あるいはパロディーなのだ（中村 181）。

イギリスのニューウーマンたちが、ブルジョア世界のプライベートな私室の空白を拒否して職業と自活、そしてセクシャリティーの自由という、それまで男たちにのみ与えられていた経験世界へと向かい、そしてその先に女性の自立を基礎におく新しい親密圏のあり方が模索されたのに対して、ナターシャが踏み込んでいく、その外部の経験世界の内実とは、そのような現実の裏付けに乏しい、博愛や自由と言うあいまいな観念だけを頼りとした、新しい男女の関係のあり方、さらにその先にある理想社会のありかたへの模索を伴った、どこか空想的な狂騒劇にも映る。物語の終わり近く、アリョーシャに去られたナターシャは次のように語り手に述べる。

「ヴァーニャ、あれは夢だったのね…何もかも、この一年間にあったことのすっきりが」

（『虐げられた人々』355）

中村は、彼らの求める、相手を束縛しない、無私な愛情のありかたに関する、観念的で理想主義的な態度には、ドストエフスキー自身がオムスクに投獄される以前の理想に燃える社会主義者であった四十年代頃の自画像に対する自嘲、また六十年代の西洋主義的進歩主義者に対する皮肉で意地の悪い眼差しがあり、そしてそれは一部、その空想主義をあざ笑う、自らも若き日に空想的博愛主義

者の時代があったと語る公爵の視線と重なっていると指摘している（中村 193-195）。つまりこの無力な博愛主義者はドストエフスキーの脱ぎ捨ててきた過去の姿だというわけである。民衆への献身的奉仕というレトリックを伴った西洋主義者たちの革命的進歩思想の水脈が、六十年代以降、いかに暴力とテロリズムとへと急展開する可能性を秘めていたか（革命の首謀者が仲間を残酷な方法で殺害したネチャーエフ事件に、彼が後に強い関心を引かれ『悪霊』を執筆した際のテーマもそこにあった）を考えると、極端から極端へと振れる、ロシア人のあり方に、デラシネ（＝故郷喪失者）の状態を見ていたのであり、空想的博愛主義者への侮蔑は、博愛主義そのものというよりも、身体性の裏付け—それは歴史的、社会的に形成された伝統といってもよい—そしてバランスを欠いた西洋主義者たちの観念に先走るデラシネ（＝故郷喪失者）的なあり方に対してのものだったのである。それを「世紀の子」である彼は自らの問題として内面化したのである。

しかし、博愛主義的同胞愛はドストエフスキー自身にとって、後のアリョーシャやゾシマ長老の創造に見られるように、あくまでも中心主題であり続けるので、ドストエフスキーにニヒリズムのみを見るのは妥当ではない。博愛的同胞愛というユートピア的テーマは、社会主義者からドストエフスキーのようなスラブ主義者（より正確に言えば大地派）まで、「人類開闢以来の大問題」を純粹に考える十九世紀ロシアの人々にとっての大きな主題であったが、それは人類レベルへと拡大され投影された親密圏の別名でもある。ドストエフスキーはこの人間関係のありようを、家庭の親密圏と利害関係からなる社会へと—外部に対する家庭のエゴや、その内部での抑圧性を伴いながら—二分する、成熟した近代社会の大人の知恵にはなく、しかしまた空想主義的博愛—ドストエフスキー的リアリズムから言わせればおそらく、空想的社会主義も科学的社会主義もともに空想だということになるのだが—にでもなく、それに身体性を与えるロシアの大地信仰に見出した。イギリスにおいてヴィクトリア朝産業社会の成立以前のロマ

ン派の時代において、この無垢と経験の様相が、都市対自然という対立構図として現れていたことを考えれば、これは何ら不思議ではない。しかし、イギリスロマン派の自然と異なるのは、それが単にキリスト教の代替としての自然ではなかったということである。彼においてロシアの大地とロシア正教は重なり合っている。ソーニャの殺人犯ラスコリニコフに対する神への懺悔の促しが、大地への接吻の要求という形をとることにその一例が示されるように。ロシアにおいて無垢と経験のアレゴリカルな関係は、このように、ドストエフスキーにあっては、西洋主義対聖なるロシアという大きな対立構図に収斂する。そしてロシアの大地は、本作では武骨で純朴な土地に根差して生きる在郷地主イフメーネフに代表されている。

親密圏という無垢領域の回復された領域は、イギリスでそうであったようなセルフ・メイド・マンへの、言わば他人任せの形で、家庭空間の中に再現されるのではない。男／女、大人／子どもなど経験と無垢を請け負ってきた二項対立は溶解し、その主題は、ジェンダーの範疇を超え出る地平へと拡散しており、女性キャラクターや子どもまでもが、経験領域に投げ出されているからだ。そこで彼らが通過する経験とは自我への孤立と他者への否定性、そして贖罪と他者への赦しへの希求、これらの矛盾と葛藤の中を揺れ動きながら、その苦悩の中に再帰的な他者関係を見出そうともがく内的経験世界なのである。

この内的経験領域とそこでの実存的自由意志の選択という作品の底流を流れるテーマから見た場合、先述したように、語り手が持つ、公爵的な自由意志の一つの対極を指し示す羅針盤的な作用は見逃しには出来ないと思う。語り手は物語レベルにおいても、公爵に対抗して奔走するが、自由意志の方向性というテーマのレベルにおいても、それぞれのキャラクターたちに働きかけ自己放棄を促していく、つまり公爵と全く逆方向の作用をもたらす力として存在しており、その意味において公爵の対極に位置している。

そして、その公爵の意志こそはこの物語の震源地として存在してすべての者たちに作用を及ぼし

ている。彼の、家庭イデオロギーの中に係留されず、一切、義務と責任の抑制や裏打ちを欠いた、その無際限な欲望の追求は、他者を欠いた絶対的自由として表現され、他人は、利己的な目的のために利用し踏みにじってもかまわない道具でしかない。ネリーの母親やイフメーネフを利用した時に、また、持参金を目的に、伯爵夫人の娘とアリョーシャの結婚を画策してナターシャの思いを踏みにじった時にそうであったように。

キャラクターたちはそれぞれに、この公爵の影響力に晒され、誰一人無傷ではない。その意味において公爵は一種の偏在性を持つ、皇帝（＝ファロス）不在の空隙に現れた負のファロス、ジョーカーなのだ。それゆえ、各キャラクターたちの被る被害は他者関係を破壊されることに止まらない。彼らが直面するより根源的な被害・危機は、公爵と同じような、人間不信と他者への否定性を反復的に内面化し、いわば公爵の象徴レベルの子となってしまうことにある。そして、その経験の最も中心に位置するのがネリーである。本作では「子ども」というもう一つの無垢のカテゴリーも、すでにその本来の無垢性を失うという脅威に晒されているのだ（MacPike 51）。祖父との親密圏の中で、ロンドンという経験領域の外に逃避する『骨董屋』のネルと比較すればよく分かることだが、ネリーは祖父と母親の決裂した関係に巻き込まれ、また母の死後、都市ペテルブルクに閉じ込められ、ブカの娼館で大人社会の醜悪な現実を目の当たりに経験し、また虐待されることで酷い傷つき方をしており、彼女の相手を見つめる「燃えるようなまなざし」（『虐げられた人々』156）に象徴されるように、拭い去りがたい人間不信と、傷ついた自己への病的なこだわりを養ってしまっている。また語り手との対決的な対話の中で、公爵は自分の肉欲の追求について恥ずかしげもない嘯くが、ネリーはブカの娼家でセクシャリティーの収奪の危機に晒される時、それは「公爵的なもの」の犠牲に晒されているとも言えるのであり、加害者と被害者は、そこにおいても先鋭化した形で向かい合っている。

このようにネリーやその他のキャラクターたち

も、人間関係の破壊や、内的亀裂の中に投げ込まれ、そこで公爵的な人間不信と否定性を伴う自己主張を内面化し、その結果孤立と憎悪の世界を拡大するのか、あるいはそれを超え出て他者とのつながりを回復しようとするのか選択を迫られている。それがこの作品の経験のあり方を決める範型なのである。

親密圏とはその経験を経た後に回復される他者関係に他ならない。そして、そこで回復される親密圏とは、家庭という、守られ閉じられた私室へ閉塞するのではなく、同胞愛的共同体へと広がり拡大する方向をとる。この共同体の生成は、物語レベルで言えば、先述した、互いに相似してはいるが無関係であった二つの物語が、ネリーを中心とする苦悩体験の共有を通じて重なりあい、融合していくことに暗示されている。

小説の結末部において語り手に頼まれネリーは、祖父スミスと母親の悲劇的な親子の物語の顛末を語る。これは、ネリーにとって、決して人に語らぬと決めた、母親との苦しみとの共有体験を開示する自己犠牲的行為であり、その決心には語り手に対して芽生えた愛がきっかけとなっている。そしてイフメーネフの心にスミスと娘の悲劇がまざまざと映じることで、イフメーネフは今、自分と娘が投げ込まれ身動きがつかなくなっている悲劇の全貌を俯瞰する客観的な視点を得、そこで初めて彼の自我の殻は砕け去る。そして、まさにその瞬間に、娘のナターシャが倒れ込むように、ドアを開けて駆け込んできて父と娘の和解が果たされる。ネリーの自己犠牲的な跳躍により、二筋の独立した物語が、苦悩の共同体として結びつき、果たされることのないスミスと娘の和解の世界が、イフメーネフとナターシャの和解となって代理的に現出する。そしてイフメーネフは抑圧していた父性愛を解放し、ネリーは死の床で家族に中に受け入れられ、物語は美しい結末を見る。

結論

本稿ではイギリスとロシアの社会背景の違いを視野に入れながら、ディケンズ、ドストエフスキーそれぞれの作品における、家庭、親密圏の問題を

考察した。イギリスは、いわば社会そのものが、聖性の領域を女性が肩代わりして、それにより男が免罪符を得、外部の経験世界での行動の自由を得るといふ、社会ぐるみでの役割分担が、見事に効を奏した近代世俗社会の一タイプだったともいえる。

ここでは、影響力を失ったキリスト教の代わりに、世俗版の宗教イデオロギーを発明することで、聖域による、世俗社会の下支え、意味づけを行った。いわば、ブルジョア産業社会というハードは、世俗版宗教イデオロギーというソフトを得ることで作動したともいえる。このように教会権力と政治権力は、互いに支え合い、教会権力は、資本主義的人間を生成するカルヴィニズムの言説と、家庭でのジェンダー的分業を支える言説を提供することで、国家の権力を「ソフトな権力」という形に変換し、男たちに行動の自由をもたらしたわけだ。『デイヴィッド』におけるセルフ・メイド・マンの成長の過程はまた、そのイデオロギーの主体生成力の中で、しかしそのイデオロギーに潜在する父権的抑圧性と、同一化することなく実現する家庭の回復の物語であり、それゆえ、それは同時に親密圏としての私室ともなっていた。

一方、イギリスと異なり、無垢・聖性や経験世俗領域の分業・相補関係を支える実効性のある社会神話の不在状況が、この『虐げられた人々』の背景にある、当時のロシアの状況であることが確認された。近代化、未だならず、そして皇帝権力と、それに基づく前近代的父権も揺らいでいる無秩序な世界。これが、上からの近代化の中で、ヨーロッパの輸入思想の影響のもと、さまざまな相対立する思想傾向を持つ知識人、貴族を生み、彼らがそれぞれに新たなロシアを模索しつつあったこの時代の姿だった。しかしそこには、一周遅れであるからこそ先頭にたつという逆転の視座も潜在する。救いの光は東方からというスラブナショナル主義的な言辭にもそれは示されている。

そして、このまさしくドストエフスキー的視座から見た場合、世俗的宗教イデオロギーを身体化して発展する十九世紀イギリス社会もまた、近代合理主義、物質主義の流れに掉さず一種のデラシ

ネ(=故郷喪失者)なのである。ドストエフスキーがどれほど具体的にその未来を予見していたかは別にして、イギリス近代産業ブルジョア社会を始めとするヨーロッパ社会は、その後、二十世紀へと進み、更なる世俗化と大衆消費文化の進展に伴い、十九世紀的モラルをも喪失し、聖性の超越領域はカーニヴァル的な消費的祝祭空間の日常化の中へと変化、拡散していく。そして、欲望追求の自由は、他者の権利を侵害しないという制限付きで、肯定、奨励され、消費活動のみならず、今日ではセクシャリティーの享受やジェンダーの選択も、自己責任、自己決定に委ねられるようになっていく(キデンズ 29-31)。このようにイギリスを始めとするヨーロッパ近代以降の流れは、欲望と結びついた形での自由の拡大であり、その自由の保障を求める主体も、フェミニズム・ジェンダー理論やクエア理論など、父権性・異性愛的ブルジョアイデオロギーへの転倒的意欲を秘めた諸思想の登場とともに、女性ジェンダーや同性愛者たちマイノリティーへと広がって行った。この自由、欲望、自己選択の拡大の流れは、近代の宿していた歴史的必然であったかもしれない。

そして、この流れの中で、家庭の天使を中心とした祭壇としての家庭の親密圏は、結婚制度内部での女性の法的地位の向上あるいは、その結婚制度そのものに、あるいは異性愛制度にすら拘束されない、より自由で多様な親密関係のありかたへとシフトしていった。それがよって立つ基盤は、自己選択、自己決定の権利を伴った、自立した個人という名の私室なのである。他者に干渉しないかわりに他者からも干渉されないという、多様な価値の共存、これは現在のところリベラルな思想の向かっている先である。しかしこれは一步間違えば、自己決定の私空間以外の世界への無関心につながりかねない。

それに対して、ドストエフスキー世界での親密圏とは『虐げられた人々』にはまだ萌芽としてしか示されていない、苦悩と浄化を通しての内的自己超越を通して構想された同胞愛的共同体であり、それは背景にロシアの大地と磔刑のキリストという宗教的テーマを伴いながら、これ以降の作品にお

いて成熟していくのである。ドストエフスキー作品の人物たちが男女ともに投げ込まれる、個人の自己決定という実存的私室は、この背景との再帰的關係の中に現れ、登場人物たちは、肯定的、あるいは否定的身振りの中で、その背景との関係を模索し、あるいは、それに対してどのように応じるかの回答を迫られるのである。彼らは神の問題を避けて通ることができない。そして、ある者たちは他者の苦悩に共感し、あるいはその苦悩を自らの問題として引き受けコミットしていく。以上考察した、政治的に単純化すれば宗教保守と世俗的リベラルの二項対立となる、この自由の探求及び親密圏に関する二つの考え方の方向は、あるいは対立するものではなく、むしろ相補的、連帯的なものとも成りえるのかもしれないが、その問いは本稿の範囲を超えるものであり今後の課題としたい。

いずれにしても、ドストエフスキーはスラブ保守の側に立っているのだが、同時に注意が必要なのは、ヨーロッパ対ロシア、また西洋主義インテリゲンツァ対スラブ主義者というその遠近法の中で、都会人ドストエフスキーもまた近代の毒を十分に飲んだ「世紀の子」だったし、その彼にとって、世俗合理主義的西洋に対置される、ロシアの大地とそこに生きる人間とは一種のオリエンタリズムの眼差しの中に現れる風景だったということである。彼に「百姓マレイ」という短編がある。空耳でオオカミが来たという叫び声を聞いて恐怖に怯える少年を慰める、温かみを帯びた農夫の姿は、都会人ドストエフスキーにとって、彼のオリエンタリズムの対象としての民衆の理想化されたヴィジョンであり、そのイメージは、本作では、都会派のシニカルで狡知に満ちた公爵と対立する、土地に生きる実直な在郷地主、イフメーネフに重ねあわされており、そこに西洋主義対ロシアのキャラクターレベルでの構図を見てとることができる。

もっとも、すでに確認したように、これは彼が苦悩を経て回復すべき、先にある姿であり、小説の展開を通して、彼は、その無垢世界のイメージを遠景に持ちつつも、こちら側で苦悶する裏切られた父親、いわば生みの苦しみに投げ込まれて

いるロシアの身体なのである。そのイフメーネフが、押さえつけていた父性を解放しネリーを抱き留める結末は啓示的である。ドストエフスキーの同胞愛とは、キリスト教的終末論のイメージを伴うが、それはこの小説の結末に描き出された美しい親密圏の、人類的に拡大された姿なのである。

そして、ドストエフスキー自身、自らの懷疑とニヒリズムの溶鉱炉を経て、そのオリエンタリズムの風景の中に、単なる観念や理想化ではない、「高次のリアリズム」を伴った、巡礼や少年、娼婦、精神を病んだ貴族、ロシア正教の長老やその信奉者の青年たちのキャラクターを造形していった。そこにはあまりにもこの世離れしているが、しかし決して空想的、観念的とは言えない人物群が創造されている。「もっとも美しく強い人」であり謎めいた人であるキリストの姿の反映として。彼の作品を読む難しさは、一つには、彼のオリエンタリズムの中に、一種啓示的とも言える高次のリアリズムが宿っている点にある。否定的ニヒリズムを追求した『悪霊』から、大肯定の文学『カラマゾフの兄弟』に至るまでの、大きな振幅を伴った彼の執筆活動は、そのパラドクスを実現するための試みなのである。

参考文献

- チャールズ・ディケンズ 『骨董屋』上下巻 北川悌二 訳 1989年 ちくま文庫
- チャールズ・ディケンズ 『デイヴィッド・コパーフィールド』1～4巻 中野好夫訳 1967年 新潮文庫
- チャールズ・ディケンズ 『荒涼館』(1)(2) 筑摩 世界文学全集第22、23巻所収 1971年 筑摩書房
- 青木雄造、小池慈訳 1976年 筑摩書房
- チャールズ・ディケンズ 『オリヴァー・トゥイスト』 上下巻 小池慈訳 1990年 筑摩書房
- フォードル・ミハイル・ドストエフスキー 『虐げられた人々』ドストエフスキー全集第四巻 米川正夫訳 1957年 河出書房
- フォードル・ミハイル・ドストエフスキー 『悪霊』ドストエフスキー全集第九巻、十巻 米川正夫訳 1957年 河出書房

- フォードル・ミハイル・ドストエフスキー 『カラマゾフの兄弟』ドストエフスキー 全集第十二巻、十三巻 米川正夫訳 1957年 河出書房
- アンソニー・ギデンズ 『親密性の変容』松尾精文、松川昭子訳 1995年 而立書房
- デビッド・ノッター 『純潔の近代』2007年 慶応大学出版会
- 中村健之介 『ドストエフスキー・作家の誕生』1979年 みすず書房
- 西條隆雄、植木研介他編 『ディケンズ鑑賞大辞典』2007年 南雲堂
- ケネス・クラーク 『芸術と文明』河野徹訳 1975年 法政大学出版局
- R. ヒングリー 『19世紀ロシアの作家と社会』川端香男里訳 1990年 中公文庫
- Baumgarten, Murray "Fiction of the City" *The Cambridge Companion to Charles Dickens* 2001
- MacPike, Lorealee *Dostoevsky's Dickens: A Study of Literary Influence* 1981 George Prior Publishers
- W. J. Leatherbarrow Ed *The Cambridge Companion to Dostevsky* 2002 Cambridge University Press
- Mochulsky, Konstantin *Dostoevsky: His Life and Work* Princeton University Press 1967 Minihan, Michael A translated
- Patmore, Coventry. *The Angel in the House* 2010 The British Library

要旨

本研究において、家庭における、親密圏の破壊と再生について、ドストエフスキーおよび、ディケンズの小説を題材として、また当時のイギリス、ロシアの社会状況の差異を視野に入れながら比較、考察する。その中で、家庭の天使とセルフメイドマンの理念を無垢と経験というアレゴリカルな二項対立の相互作用という観点から、再考する。一方、ドストエフスキーの小説においては、この無垢と経験という二項図式は、イギリスのようなブルジョアのイデオロギーを持たない家庭の内部においてではなく、むしろ西洋合理主義対スラブ主義の葛藤という大きな枠組の中に現れることが示される。

(2015年9月30日受稿)